

(記入日：2020年9月27日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

授業コード	科目名	年次	前後期	選・必	単位
A011703-01	MANGA と anime	2	前	選	2
M011103-01	総合講座 (3)	1	後	選必	2
M101001-01	基礎ゼミナール	1	前	必	2
M101006-01	コミュニケーション基礎演習	2	前	必	1
M101013-01	リスニング I	1	通年	必	2
M101103-01	イギリス文化史 (1)	1	前	選必	2
M101104-01	イギリス文化史 (2)	1	後	選必	2
M101204-01	英語文学演習	2	後	選必	2
M101212-01	インターナショナル・プログラム (1)	1	後	選必	2
M101307-01	リサーチ&プレゼンテーション	3	通年	選必	2
M101308-01	リサーチ&プレゼンテーション	3	後	選必	2
M108001-03	セミナー	3	通年	必	4
M109001-03	卒業研究	4	通年	必	6

※2つの「リサーチ&プレゼンテーション」は合同授業

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「基礎ゼミナール」と「国際コミュニケーション」では、資料の収集や分析、プレゼンテーションなど大学での研究活動の基礎を身につけさせるとともに、自分の立場を明確にした上で意見を述べるということを体験させるよう努めた。オンライン授業が主だったため教室でのプレゼンテーション訓練や学生の相互評価はあまりできなかったが、Teams を通してプレゼンテーション原稿などの課題を提出させ、オンラインでのプレゼンテーションを行って教員がコメントした。

「リサーチ&プレゼンテーション」では自らテーマを設定して英語プレゼンテーションを行うことを目的とし、グループワークにより参考文献の検索、文献の評価と要約、Core Structure の構成など段階を踏んだ活動を行い、前期末にグループごとにプレゼンテーションをさせた。

「イギリス文化史(1)(2)」ではイギリスと非ヨーロッパ地域との関係に注目させ、イギリスが非ヨーロッパ地域を植民化する過程でいかに異文化を取り込みつつ自己形成したかを理解させるよう努めている。パワーポイントを PDF 化した資料を提示つつビデオ通話の授業を行い、学生がそれをふまえて課題にとり組む形をとった。共通教育科目の「MANGA と anime」では、日本の漫画やアニメが国際的な文化となりつつある状況を理解させるとともに、自分の好きな漫画・アニメ作品について、それを海外に紹介するとしたらどんな点に配慮すべきか、セリフや「描き文字」

の英訳にどのような工夫が必要かについて考察させた。「セミナー」ではイギリスの児童文学作品に関する英語論文の一部を講読させ、作品の書かれた時代の社会背景がいかに関与しているかをディスカッションしている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

リサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げたと考えている。Teams を通して提出された「基礎ゼミナール」と「コミュニケーション基礎演習」課題では学生が少しずつ自分の目的意識を明確にし、資料の扱いを身につけつつレポートの執筆やプレゼンテーションの準備にとり組んだことが示されている（エビデンス 1）。「リサーチ&プレゼンテーション」では、たとえば、プラスチックごみの問題にとり組んだ学生が、はじめはレジ袋の有料化という身近なところからスタートし、リサーチを進めていくうちにプラスチックごみの「生産レベル」での削減という問題に目を向け、使い捨てプラスチック製品を生産する企業への課税強化やバイオプラスチックを開発する企業への支援などの対策に注目していく様子が見られた（エビデンス 2）。また「MANGA と anime」の課題では、自分に関心のある漫画・アニメ作品を題材にしつつ、いかに国際社会に日本の文化を効果的に発信できるかについて独創的な考察が行われた（エビデンス 3）。

総括すれば、学生が自分の関心にもとづいてテーマを設定し、それに沿って活動するところまではある程度達成できたが、その一方、オンライン授業という制約もあり、グループワークでお互いの活動を検証・評価するところが不十分だったように思う。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生の問題意識と主体性をより高める活動が必要になる。「リサーチ&プレゼンテーション」や「MANGA と anime」のようなアクティブな学びを中心とする科目では、教員の働きかけは環境づくりにとどめ、テーマの設定やグループワークの進行を学生自身で運営するような形が望ましい。また教材についても、これまではプリントやパワーポイント資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 「基礎ゼミナール」、「コミュニケーション基礎演習」課題（非公開）
- 2 「リサーチ&プレゼンテーション」課題（非公開）
- 3 「MANGA と anime」課題（非公開）

英語 I、英語 II、ライティング III、国際文化特講 I におけるティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 小泉朝子

(記入日：2022 年 5 月 28 日)

1. 教育の責任

担当科目（令和 3 年度）：英語 I(1)(2)（1 年前期後期必修科目、各 1 単位）、英語 II(1)(2)(2 年前期後期必修科目、各 1 単位）、リーディング III（3 年前期専門選択必修科目、2 単位）、ライティング III（3 年前期専門選択必修科目、2 単位）、国際文化特講 I（3 年後期専門選択必修科目）、インターナショナルプログラム(2)（前期専門選択必修科目、2 単位）、英語科教育法 III（3 年前期教職科目、2 単位）、英語科教育法 IV（3 年後期教職科目、2 単位）、セミナー（3 年通年専門必修科目、4 単位）、卒業研究（4 年通年専門必修科目、6 単位）。

ここでは、今年度担当した科目のうち、次に述べる 4 科目について説明する。共通教育科目の英語 I（C クラス）、英語 II（再履修クラス）、専門選択必修科目のライティング III、専門選択必修科目の国際文化特講 I である。①英語 I は本学全 8 学科のうち 6 学科（史学科、心理学科、日本文化学科、幼児教育学科、児童教育学科、生活文化学科）の 1 年生の必修科目であり、単位の取得が卒業要件である。②英語 II は前述の 6 学科の 2 年生の必修科目であり、英語 I と同様に単位取得が卒業要件となっている。したがって、大学学部レベルの総合的な英語学修が求められる。③また、ライティング III は国際英語学科の 3 年生以上を対象とした選択必修科目であり、英語によるアカデミック・ライティングを修得する科目である。学部レベルでの論理的な思考力および分析力が求められ、5 段落構成で論理的なエッセイ・ライティングの習得を目標とする。④国際文化特講 I は副題として（イギリスと文化）が掲げられており、18 世紀から 20 世紀におけるイギリスの食べ物、飲み物について、イギリスの産業革命および植民地政策の理解を基盤として、19 世紀および 20 世紀の文学作品から紐解いていく科目である。そのため、当該世紀におけるイギリスの立ち位置、文化、社会的背景について学部レベルの知識、分析力が必要とされる。同時に、グループワークを通じて学生自身のリサーチスキルを向上させることを目的とする。

2. 理念

英語 I の到達目標は、「英語におけるコミュニケーション能力を向上させることができる」である。①私の英語 I における教育理念は、高校で学んだ英語よりも高度な、相手の心情に配慮できる英語を教える点にある。したがって、授業では配慮する英語または英語の敬語表現に常に留意して、相手に配慮できる英語表現の定着に努めている。文法上の間違いは

ないがコミュニケーションの相手が不快に感じるような表現を避けること、より良いコミュニケーションのために必要な、相手への理解力を培うために、英語・文化・歴史・ジェンダー等に配慮できる指導案作りを重要視している。②本来はペアワークを中心とした授業構成であるが、感染症予防の観点から昨年度に引き続きそれを見直し、ペアを組む学生同士は向き合うことを避けると同時に、大きな声での会話を避けて、発音練習、会話練習をするという形式をとった。新出単語や会話のイントネーションについては、教員による発話に従ってリピートする、という練習を経たのちにペアでの会話練習へと移行するよう、常に心がけた。③学生には毎回予習をした上で授業に臨むよう指導していたが、彼女たちの予習内容を授業時に補強する目的で、つまずきやすい単語やわかりにくい文法構造を持つ文章などを word ファイル化し、これを PDF ファイル化したものを授業前に teams に掲示することで、授業の進度に不安を覚える学生やより深い学びを目指す学生の支援とした。なお、紙の資料を好む学生のために、同じファイルの紙媒体も毎回用意した（全体の 1/3 の人数分を用意）。④学生には、毎回、授業後に掲示される Forms を利用して、その日の授業の感想や質問、理解が追い付かなかった点などを振り返ってもらい、回答が必要な場合は teams のチャットで個別に回答した。

英語 II の到達目標は、「まとまった英文を読み、内容を理解し、要約できる」である。再履修クラスを担当した今年度の英語 II における教育理念は、英語 I の理念と通底しつつ、さらに丁寧な説明および解説を心がけながら英語の長文を読ませ、その英文の背景および文化を理解させる点にある。文法事項や語彙、および段落構成法についても、前期オンライン授業時は teams のチャット機能を利用した解説を、後期の対面授業では学生の理解度を常に確認しながら各学生に応じて解説した。また、前述の英語 I と同様、前期、後期ともに事前に teams に掲示したプリントを使用して丁寧な説明を心掛けた。

ライティング III の到達目標は、「英語で論文の要旨を書くことができる。5-Paragraph-Essay の書き方を修得し、論理的な組み立てによる英文を書くことができる。」である。①「ライティング III」における教育理念は、「起承転結」型の組み立て方から脱却し、Introduction, Body 1, Body 2, Body 3, Conclusion の 5 段落構成による論理的な文章構成力を身につけさせる点にある。とりわけ、Introduction には最後に Thesis Statement と呼ばれるまとめの文章が必要であり、自分が展開していくポイント 3 つをその Thesis Statement に組み込むことが最重要視される。なお、英文を書く際の Punctuation についても理解を深めさせた。②授業では、指定されたテキストの該当部分を指定して学生に読ませ、内容を教員がまとめたのちに、テキストに従って各自が teams 上に掲示された課題に取り組み提出する、という形式をとった。習熟度は学生によって全く異なるため、授業中に各自課題に取り組みながら、疑問点があれば教員に個別に聞くよう、促した。授業内に提出する課題も高頻度で掲示したため、集中して取り組む流れができていた。③予習内容は授業の最後に必ず提示した。復習が必要とされる学習内容については、teams 上にポイントをまとめた資料を掲示し、より深い学びを促した。④質問や不明点がある場合

は、授業後に質問を随時受け付けて回答した。また、毎回掲示される課題に書き込むか、個別チャットで質問するよう促した。

国際文化特講Ⅰの到達目標は、「イギリス文学および文化について、論理的に説明できる。」である。①目白キャンパスの国際英語学科の3, 4年生の選択必修科目であるこの科目において私が教育理念としているのは、イギリスの作家、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』およびベアトリクス・ポターの『ピーター・ラビット』を講読し、作品中に登場する食べ物や飲み物から、作品発表当時の社会的背景を読み解くことである。『不思議の国のアリス』、ポターの『ピーター・ラビット』を講読し、作品中に登場する食べ物や飲み物から、作品発表当時の社会的背景を理解する。②授業の進め方は一律ではなく、(1)PowerPointによる作品説明、社会的背景の説明、(2)提示されたトピックに関するグループワーク(2~3人)、(3)テキストの講読(学生を指名して英文を読ませ、概要を述べさせる)の3つのパターンを組み合わせる実施した。③学生には次回の予習事項を提示して準備を促した。また、より深い学びを求める学生のためには、teams上に補足資料を画像ファイルとして掲示し、自発的な学びを後押しした。④学生には、毎回、授業後に掲示されるFormsを利用して、その日の授業の感想や質問、理解が追い付かなかった点などを振り返ってもらい、回答が必要な場合はteamsのチャットで個別に回答した。

3. 方法

英語Ⅰ、英語Ⅱ、ライティングⅢ、国際文化特講Ⅰの4科目に共通して実践しているのは、学生の回答や質問、疑問に丁寧に答え、フィードバックを行う点である。授業中に適宜、学生の理解の度合いを確認し、彼女たちの足並みをそろえるよう心掛けた。また、時間が許す限り、文法事項や文化的背景について、丁寧な板書や事前にteamsに掲示したwordファイルおよび同内容の紙媒体のプリントを活用して学生の理解を補強した。同時に、教室内で学生からの疑問に答え、授業内容をフォローできるように常時支援した。また、授業後にはFormsによる感想・質問を受けつけて、学生の感想や疑問点については可能な限りこまめに教員からコメント送信、回答送信を心掛けた。

その他、英語Ⅰでは、高校での英語教育で陥りがちな(マナー上は)誤った英語表現や、使い分けることの難しい使役動詞のニュアンスの違い、動詞の時制の違いが指し示す意味についても、例文やエピソードを挙げつつ板書で丁寧に説明した。教員の発音をリポートする際には、言葉以外のコミュニケーション(体の向きやアイコンタクト、ジェスチャー等)の重要性を常に指導した。また、英検の合格には、ボキャブラリー増強が必須であることを指摘し、常時意識するよう、指導した。

英語Ⅱでは、再履修クラスだったため、学生の理解度に寄り添うことに配慮した。英文パッセージの背景について説明を加え、学生の理解を促すことも多かった。難易度の高い文法事項や表現を丁寧に解説し、さらにパラフレーズ(単語の言い換え表現)への気づき

を学生に促した。段落構成については、主要の5パターン（プロセス、分類、原因/結果、比較対象、問題解決）の構成方法に言及しつつ、板書およびプリントを通じて丁寧に説明した。また、各チャプターの文章の背景にある文化的な事情についても随時、説明した。

ライティング III では、5-Paraphrase-Essay の展開方法について、Process パターンを用いて論理的に実践した。第一段落である Introduction の最終文に Thesis Statement を配し、第二段落以降で展開される 3 つのポイントを先に提示するよう、くりかえし指導し、これを実践できるようにした。学生間の習熟度の違いを考慮して、授業中は頻りに各学生の進捗を確認し、理解不足が見られる場合はその場ですぐに指摘し、解説して、のちの大きなつまづきへとつながることがないように、配慮した。

国際文化特講 I では、PowerPoint による解説、グループワークによるリサーチ、英文テキストの講読を軸に展開した。グループワーク時には、授業内で発表するというタスクを課し、緊張感が途切れないように工夫した。なお、座学だけではなく、体験型のアクティビティも取り入れた。例えば、イギリスにおける紅茶の発展を学修する際には、資料のみならず、紅茶の茶葉の実物を 7 種類、教卓前に提示して、その形状や香りを確認させて感想を Forms に入力して提出させた。また、三大茶葉のティーバッグ（3 種。ダージリン、キーマン、ウバ）の中からひとつを選んで、授業後(帰宅後でも良しとした)に密を避けて飲み、その感想を各自 Forms に入力して提出する、という課題も組み込んだ。

4. 成果

英語 I においては、授業終了後の Forms によるアンケートで、授業中に指導された表現を使う状況について質問したり、その表現を使って将来、英語でコミュニケーションを取りたいと思う、という意見が出されることが見受けられた。英検受験を考えている学生も複数いたため、そうした学生にとってはボキャブラリーを増強する意義を感じてもらえ、有意義だったのではないかと考える。(エビデンス③④⑤)

英語 II においては、授業前のプリント提示および授業時の内容説明、文法事項・構文説明を聞くことでテキストへの理解度が深まり、英文をしっかりと理解できることに加え、自分の英語力を教員が理解してくれているので、授業に出席することへの抵抗がなくなり楽しかった、との感想を伝えてくれた学生も存在した。(エビデンス①③④)

ライティング III においては、5 段落構成による Essay Writing への戸惑いが最初は見られたものの、Thesis Statement の役割や 5 段落の構成方法を論理的に学修することができて大変役に立った、という感想を授業評価アンケートでコメントした学生もいた。また、Punctuation については、それまではやや素通りしていた分野であったため、この科目で緻密に確認することができてありがたかった、卒業研究の資料提示でも役立てたい、といった意見を得た。(エビデンス③④⑤)

国際英語学科 I においては、18, 19 世紀から 20 世紀初頭の大英帝国が植民地支配をどの

ように拡大していったのか、そしてその拡大と食材の多様化、紅茶、コーヒーの喫茶習慣とどのように関連付けられるのかが、良く理解できた、という感想を後期最後の Forms で複数得た。また、授業を通じて、当該世紀における女性の立ち位置の厳しさについて、認識をあらたにした、という意見も得た。授業内で鑑賞した映画についても、過去に鑑賞したことのある作品だったが、この科目で学修した内容を認識してから再度鑑賞すると、まったく違う景色が見えてきて驚いた、という意見も多数あった。(エビデンス①②③④⑤)

5. 今後の目標

英語 I および英語 II では、年度によって学生の習熟度が変わるため、授業中に教えられる文法事項・表現・語彙のレベルは、年度ごとに変える必要が生じるが、引き続き、学生の理解を最優先にしつつも、彼女たちの知識欲を刺激し、コミュニケーション能力や文章理解力を向上させるための授業づくりを工夫していきたい。学生の興味や関心事に寄り添いつつ、英語の学修に結びつくトピックを抽出して、授業の充実を図りたい。

ライティング III では、今後は 2021 年度よりも工夫を凝らしたいと考える。学生の記憶に残りやすいよう、授業構成を考えていくつもりである。

国際文化特講 I では、2021 年度よりもわかりやすい資料提示、およびテキストとの連動を意識した補足プリントの提示を心掛けたい。また、画像、映像等を用いた説明については、よりよい素材を求めて今後も引き続き調査していく所存である。

6. エビデンスとなるもの

- ①リアクション・ペーパー（非公開）
- ②リサーチ・ペーパー（非公開）
- ③Forms による授業の感想（非公開）
- ④配布プリント、PDF 化された PowerPoint 資料
- ⑤授業評価アンケート（非公開）